

教育実習における学生の学びと自己評価の現状及び課題

柴田俊和¹⁾ 古川雅里子¹⁾

Actual Condition and Problems of the Learning of the Student and the Self-Evaluation in the Student-Teaching at Biwako Seikei Sport College

Toshikazu SHIBATA Mariko FURUKAWA

Abstract

At Biwako Seikei Sports College, about 70% students wrestle with student acquire a teaching profession license every year.

The purpose of this study is to get a document for examination to improve class contents and a method of the teacher training at the college by catching the actual condition of the the learning and the transformation of a self-evaluation result of the this college students receiving in the student teaching.

1. The actual situation of the learning in the student teaching

I performed inventory survey of the freedom description type like the following to get the document for catching the actual condition of the learning of students in the student teaching.

- (1) What did you think to learn in the Student-Teaching?
- (2) What did you notice by an on-site class?
- (3) What did you understand through the Student-Teaching?
- (4) What is the problem of the study after the Student-Teaching training?
- (5) What is it to have helped the Student-Teaching training in the learning at the college?
- (6) What is it to want to study by the class of the college beforehand?
- (7) What is it to tell an impression through the whole student teaching for a third grader?

The following became clear, the students could feel and think and learn much things that they cannot experience in the class at the college by the experience of the student teaching.

2. About the transformation of a self-evaluation result in the student teaching

The self-evaluation papers for the student teaching were distributed to students at the time of guidance before the student teaching. I added up an evaluation result collected after student teaching and made it a document of the consideration.

I think to continue the examination of the curriculum to improve the problem that became clear with this study and pointed out in training schools.

Key words : Student-Teaching ,Learning in the Student-Teaching,Self-Evaluation

1) 生涯スポーツ学科

1. はじめに

びわこ成蹊スポーツ大学において、毎年7割程度の学生が教職免許を取得するために教育実習に臨んでいる。本研究報告の目的は、本学学生の教育実習における学びの実態や実習中の自己評価結果の変容を捉えることにより、大学での教員養成関連の授業内容や方法を検討・改善するための資料を得ることにある。

教育実習に際して、学生たちが、何を求めて実習に参加し、実習を経験することで何に気づき、どのようなことに困難を感じ、実習を通して何を身に付け、実習に際して大学の授業にどのような不足を感じたのか、実習後に何を学ばなければならないと考えたのか等の学びの実態を知ることが、保健体育科教育法や教育実習事前指導等の授業内容や方法の検討・改善に貴重な資料を提供してくれると考える。

また、導入の検討が必要な教育実習における指導と評価の一体化への対応として、実習校で行われる実習評価の評価項目や評価規準と同様の視点で実習生本人が行う自己評価が、東京学芸大学で平成19年度から実施された。この自己評価は、教育実習に臨む学生たちにとっては、どのような観点や評価規準で自分の実習成果が評価されているのかを理解でき、実習期間を通じた自己の変容を具体的な観点で評価することにより、改善努力すべき事項を明確に自覚できる点で好評であった。そこで、本学の教育実習における評価項目・観点とはかなり異なった自己評価項目であるが、試みに東京学芸大学で使用されている調査用紙を利用して、実習中間時と終了時の学生自身による自己評価を試行した。

教員養成系大学における附属学校や実習協力校での教育実習では、指導を担当する学校と大学の教員間での事前打ち合わせや事後反省会等を持つことができる。しかし、本学のように学生の出身校である母校での教育実習

をお願いしている大学では、実習現場での学生の実態を知ることができる機会や資料は学校訪問と実習評価票のみである。

実習校から求められる課題や問題点への対応だけでなく、実際に実習現場で苦勞している学生の声にも耳を傾けて、大学での授業改善に取り組んでいく必要があると考えて本研究に取り組んだ。

2. 教育実習における学びの実態

2.1. 調査の方法

教育実習における学生たちの学びの実態を捉えるための資料として、保健体育科教育法Ⅱを受講している本年度教育実習を経験した学生21名とゼミの学生8名の合計29名に対して、実習終了後に7項目の質問で構成した記述式調査用紙を提出させ、回答を集計考察した。本年度教育実習を行った学生の総数162名から見ると調査データは少ないが、得られた結果を見る限り、学生たちの代表的な思いが記述されていると考えた。

2.2. 実習で何を学ぼうと思っていたか

「今回の教育実習期間を通して、あなたが学ぼうと思っていたことは何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。回答は、①大学の授業との関わり、②教員という仕事や生徒理解に関して、③授業に関して、の3つの視点で分類して記載した。

①大学の授業との関わり

- ・大学の講義ではわからない真の現場ではどういうことが繰り返し広げられているのか。
- ・大学で学んだことを実際の現場で力を試してみたい。

②教員という仕事や生徒理解に関して

- ・大学で学んだ教師像と実際の現場で働く教師像の違いを捉え、自分が教師になる時にどのような教師になりたいか、自分なりの教師像を作ること。
- ・生徒と関わることで、“教師としての自分”というものを発見する。

- ・教師という仕事がどんなものなのか、また、生徒に教えるとはどういう事なのか。
- ・中学生の実態を把握し、教師という仕事はどのようなことかを学ぶ。
- ・どうすれば生徒のことを理解できるか、教師・生徒との関係の築き方を学ぶ。
- ・初対面である生徒と打ち解けるためのコミュニケーションの方法。
- ・体育教員の一日の流れ、生徒との関わり方、授業の進め方の工夫。
- ・最近の高校生の雰囲気、実際に教師として教える前に、意識しなければならないこと。
- ・教師としての仕事。授業の展開の仕方や普段見ることの少ない授業以外の仕事を体験。
- ・先生がどのような点に配慮をしながら授業を行っているのか。
- ・生徒との触れ合い、授業の進め方、展開の仕方、学校の仕組み。
- ・授業づくり、学級づくり、子どもとの関わり。
- ・高校の実際の授業の現状。体育教師の役割や働き。

③授業に関して

- ・授業をどのようにしていくのか、指導案を含め、展開の仕方など。
- ・保健・体育の授業をどういったものにすれば、効果的に目標達成ができる授業になるか。
- ・生徒がどのような授業を面白く思えるのか。
- ・高校生がどのように保健体育の授業に取り組んでいるのか。
- ・授業をどのように実施していくか、どのような目標を立てて授業を行っていくのか。
- ・授業を展開するために必要な技術、知識を身に付ける。現場の雰囲気を知る。
- ・指導案の書き方、授業運営の方法。

上に示された内容は、実習終了後の調査だったので、実習を経験したことにより実習前に考えていたこととは若干変化している可能

性があると思われる。しかし、実際に学校現場に行かなければ体験できない内容が多く記述されていた。具体的な授業に関することより、教師という仕事や生徒との関わりに関する事柄を学ぼうと考えていた学生が多かった。

2.3.現場で授業を行って気付いたこと

「教育実習の現場で、授業をやって初めて気がついたことは何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。調査回答は、①大学の授業との関わり、②教員という仕事や生徒理解に関して、③授業に関して、の3つの視点で分類して記載した。

①大学の授業との関わり

- ・大学の授業では、指導案をきっちりと作成し、指導案通りに授業を運営することが大切だと学んできました。また、授業の反省点や評価も指導案を中心に考えさせられたので、言葉使いや授業を進めるスピードを意識させられていたように思えます。しかし、実際に教育実習に行ってみて、指導案通りに授業を進めることがよい授業と言えないことに気づきました。指導案は、単元や1時間を通して生徒に何を伝えたいか、単元の幹となるものを明確にするためのものだと学びました。授業で一番大切なことは、教師の指示に対する生徒の反応や態度を見て、臨機応変に対応し、単元や1時間で伝えたい・教えたいことをしっかりと生徒に理解させることで、それができた授業が良い授業だと言うことに気づきました。
- ・大学で模擬授業をやったようには、生徒は動いてくれない。細かく指示しなければ生徒は動けない。
- ・いくら大学で模擬授業をやったとしても、びわスポの学生はレベルが高いので、現場とは全く違うということ。人前で話をしたり、指導案を考えたりしたことはとても役に立ったが。ものすごくできる子から全くできない子までいる中で、全員同じ事をす

る時に、どこにレベルを合わせたらいのか分からなかった。

- ・2, 3年で模擬授業を経験したが、実習とは全く違うため意味がない。実習を終えてからやった方が勉強になるし、先生方のアドバイスの意味が分かると思う。

②教員という仕事や生徒理解に関して

- ・中学校に行ったのですが、学年の中でも相当できる子とできない子、またやろうとしない子の差がはっきりしていること。
- ・生徒から見た授業ではなく、教師として授業を見る・するという違う視点から見た新鮮さ、そして運営の難しさ。
- ・私が思っていることを伝えても、生徒たちは違うことをやり出すことがあり、ちゃんと私自身が思っていることを伝えることの難しさを知った。
- ・想像していた以上に運動が嫌いや苦手な生徒が多く、やる気のない生徒がおり、彼らを授業に集中させることの難しさ。
- ・教えるということの難しさ。生徒に興味を持たせるところから始めないと話を聞いてくれない。
- ・思ったとおりにいかないこと。オフタスクや待機はかなり出ること。中学と高校ではレベルがかなり違うこと。
- ・生徒は先生の様子をよく見ているということ。授業を行う上で、自信を持ってやらないと、生徒のモチベーションはやはり低くなります。自信を持つためには、教材研究が十分に必要であることを学びました。
- ・人に教える、学習させるということについて、まだまだ勉強不足だった。

③授業に関して

- ・思い通り、考え通りになかなか進められない大変さ。
- ・予想外の質問への返答でまとめきれなかったこと。
- ・大声で指示を出しても指示がよく通るわけではなく、時には小声で指示し、抑揚をつけることが大事だと気付いた。話術の難しさ。

生徒を引きつける話題づくりの難しさ。

- ・50分という限られた授業時間の中では、生徒に伝えられることは1つか2つの内容しかないこと。多くのことを伝えようとしすぎると、授業の目標、めあてがあやふやになってしまい、生徒は分からなくなってしまふということ。
- ・板書計画の重要性に気がついた。実習で初めて板書計画の存在を知って、授業内容を伝える大切なものだと知った。
- ・準備が全然足りなかった、自分が分かっている、人に伝えることが難しい。
- ・授業をする難しさ。どのようにすれば皆が聞いてくれるのかを考えるのが難しかった。
- ・生徒全体を見ながら個々に目を配ることがなかなか出来ず苦労した。
- ・ただその教科を教えるのではなく、教科を通して何を教えるのか、と言うことまで考えて授業を組み立てなくてはいけないと感じた。例えば、バレーボールの授業で技術的なことを教えるのはもちろんのことで、バレーボールを通して仲間とコミュニケーションをとれるようになって欲しいなど、教科で何を学ばせるのかというところまで考えなくてはいけないと感じた。
- ・体育などの体を動かすことについては、動きながら手取り足取り教えることができるが、教室での保健については質問をされた時にどれだけ準備や引き出しがあるかがとても重要で、これほど1つの授業を行うことが大変なのだということに気付いた。
- ・うまくいった授業の指導案で違うクラスを授業してもうまくいかないこと。
- ・導入の難しさや板書や説明の難しさ。安全管理の必要性。
- ・教師には柔軟な発想力と知識が必要だということ。特に、保健に関しては教科書内容以上の知識がいるということ。
- ・けじめのつけさせ方、体育では特にケガをすることがあってはならない。子どもがケ

ガをしないように整列などをして集中させること。

- ・授業を行うためには授業準備をしっかりしないと、生徒に理解してもらえないような分かり易い授業はできないということが分かった。
- ・思ったより声が届かない。自分が理解していても、その内容を生徒に伝えることの難しさがわかった。

ここでの回答をみると、学校スポーツの理論と実際や学校スポーツ専門実習における模擬授業で経験した授業というものと、多種多様な生徒を相手にして現場で行う実際の授業との違いを明確に感じ取れたようである。また、学ぶ側にいた時には考えなかったような、生徒の興味や能力の多様性とそれへの対応の難しさにも気づいている。さらに、授業運営の難しさや教材研究を含む事前準備の大切さも痛感したようである。このような現場での実習体験を通して気づいたことを確実に学習させるためにも、これから教職必修となる教職専門実習の内容や方法について、具体的に検討することが当面の重要課題であろう。

2.4. 実習を通して何を身に付けたのか

「今回の実習を通して、あなたの身に付いたと思うことは何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。調査回答は、教員という仕事や生徒理解に関してと、授業に関して、の2つの視点で分類して記載した。

○教員という仕事や生徒理解に関して

- ・実習担当の先生からは、社会の厳しさ、自分の取り組む姿勢を一から直していただき、何より教師としての心構えを教えてください、これが身に付いた大きな力である。
- ・教師としての姿勢や態度、礼儀、言葉遣い、授業準備の重要性・必要性。
- ・口やかましく怒鳴ることだけが子どもを育てるのではないこと。
- ・根気と忍耐力。対応力。臨機応変に対応す

る力。実践力。

- ・教師の仕事の多さ、大変さ。教員としての責任感や達成感。
- ・学ぶ姿勢、指導教諭の助言・指導を、自分で考え、取り入れること。
- ・自分自身を客観的に見られるようになった。少し周りを見る余裕ができた。
- ・どう説明すれば分かってもらえるか考えるようになったこと。考えるようになったからと言って、伝えたいことが伝わっているかは別問題だと言うことが分かった。
- ・授業やホームルームで自分の思っていることを生徒にしっかりと伝える力が前より上達したと思う。
- ・指導者としての責任。教師になりたいというさらなる決意。
- ・1つのことに対する追究心がついたと思う。準備段階において、あらゆる方向から物事を捉えるように心がけるようになった。

○授業に関して

- ・集団にうまく指示を通すことができるようになった。集団を動かす力。
- ・安全面に配慮した授業を行えるようになった。教科指導の基礎が少し分かった。
- ・「わかりやすく面白い授業」を目指し、保健では、絵、資料、データなどを使い、体育では運動しやすい工夫を心掛けてやってきた。教材、教具を工夫することはできる。
- ・指導案の作成から授業までで、生徒に何を伝えたいか・教えたいかを自分の中にしっかりと持つこと。実際授業を行って、生徒にしっかりと伝わっているのか分からないですが、教科担当の先生からは、1時間で何を伝えたいのか・伝えたいのか感じ取れる授業に少しずつなってきたと言われたので、自分なりに身に付いた能力だと思います。
- ・皆が授業に参加するために、どのように工夫すればよいか。周りをもっと見ることが

できるようになった。

- ・何がポイントなのか、何を聞いて欲しいのかを明確にし、話に間を持ったり、声のトーンを変え抑揚をつけて話をする、などが3週間で身についたと思う。
- ・指導をする上での準備は当然のことで、それについてどのように分かり易く、楽しく授業を行うかという面で、自分自身の考えや指導に対する幅が広がったように感じる。
- ・臨機応変に対応する力とその場の流れを考えて返答ができる力が身についたと思う。
- ・対応力。体育、保健の授業を通して、指導案通りに行くことはない中で、どこで時間配分を延ばしたり、短くしたりするか、練習回数を増やしたり減らしたりする、対応力がこの実習でついたと思う。
- ・自信を持って堂々と話すこと、指示すること、しかること。
- ・適応力。はじめは授業をこなすので精一杯だったけど、徐々に生徒全員に目を配ることができ、生徒ごとに対応できるようになった。声かけが身についたと思う。
- ・授業の仕方や生徒への言葉かけ、生徒との関わり方、授業の流れ、先生の動きなど。

以上のような回答から、学生たちは3週間の実習を通して、教師という仕事の難しさとそこで何が 필요한のかを十分に感じられたようである。また、授業に関しては、内容や方法が重要なのではなく、目的やねらいの重要性に気づけたようである。さらに、指導案通りに授業運営するだけでなく、その場の状況に応じて臨機応変に対応できることの必要性にも気づいたようだ。これらのことは、大切にしたい彼らの学習成果である。

2.5. 実習後の勉強の課題

「教育実習を終えた現在、あなたの勉強の課題は何ですか」という質問に対して、以下のような回答が得られた。調査回答は、①大学の授業との関わり、②教員という仕事や生

徒理解に関して、③授業に関して、の3つの視点で分類して記載した。

①大学の授業との関わり

- ・専門種目以外の指導法を学ぶ、また専門種目をより専門的に勉強する。
- ・勉強の課題とは少し違うかもしれませんが、卒業までの数ヶ月、今自分がしなくてはいけないことに情熱をもって取り組むことです。それが勉強だったり、卒業論文だったり、部活動だったりその他色々あります。そのどれにも真剣に取り組むことで、卒業後、何らかの形で成果が出てくると思います。
- ・教育に必要な教育学であったり、ゼミで行っている心理学であったり、他に自分の専門分野以外のスポーツの知識が必要であり課題です。
- ・剣道・柔道など今まで経験したことのない種目を実際にやってみることに、知ること。

②教員という仕事や生徒理解に関して

- ・正直全部だと思います。現場で教科担当の先生の授業を見学して、自分に足りない部分は無限にあると思いました。その中で自分が最も足りないものは、ノウハウであったり、経験値だと思います。その他で足りないものは教材研究だと思います。
- ・実習時に何も出来なかったという気持ちなので、課題は多々残ったと思う。まずは気持ちの面でもう少し教師像というものをまとめる必要があると思う。
- ・足りないことが多いと思う。先生になるだけでなく、教育実習を終えて指導する立場として必要な要素が足りないと感じたので、全てのことを勉強しなければならないと思う。
- ・生徒は、話を聞いてくれる人を求めていると感じた。その中で、私は有効な助言が出来たのかという部分について思い悩んでいる。そういったことは、私自身経験不足・力不足だったと思ったし、今の課題だと感じています。

③授業に関して

- ・知識不足の解消，教材研究。工夫した授業ができるように，アイデアや知識を付ける。
- ・的確でスピーディーな指導が必要だと感じた。
- ・授業をしていて，感覚のみでは指導できないことに気付いたので，自分の専門種目以外の運動の知識を得ること。
- ・目標を達成させるために，どういった学習方法が効果的か。
- ・実習では，声の大きさ，トーン，発問の仕方，同じ内容を言うにも，言い回しを少し変えるだけで伝わり方が全然違うことを知った。今後は，会話の仕方を勉強していきたい。
- ・もっと基本的なことをしっかり勉強する（保健など），色々な種目ができるようにする。
- ・指導案を書くのが遅く，提出するのが遅くなったので，何事も前もってしておくこと。
- ・一般教養と教職教養の勉強。跳び箱が跳べない生徒をできるようにする授業の工夫。やる気のない生徒についても同様。→授業の工夫，教材勉強。
- ・実際の教育現場では，授業は1年間の計画，生徒へは3年間という長期的な流れを考えた上での指導を行えることが課題です。
- ・授業の内容のレパートリーを増やすこと。保健の授業に対しては，生徒に考えさせるような発問や発言に対するフォロー。
- ・保健の授業では単調に話してしまうことが多かったので，上手な話し方を練習すること。人間性を豊かにすること。
- ・授業運営の方法，専門的な知識。できない生徒にどうやって教えるか。

ここでの回答には，学生個々の実習結果の反省として考えた事柄が示されている。大学での幅広い領域での学修の必要性，教員として必要な経験，教材研究の重要性に気づいたことは，これからの彼らの研鑽において明確な方向を示すものになると考える。

2.6. 大学での学びで実習に役立ったこと

「大学で学んだことの中で，今回の教育実習で役立ったことは何ですか」という質問に対して，以下のような回答が得られた。実技，理論，模擬授業，その他に分類して回答を記載した。

○実技の授業に関して

- ・陸上競技の授業内でやったハードルの指導法，正直にそれ以外はあまり役立ったとは思わなかった。基本練習での方法の多さ。
- ・できない子のために何をするか，安全面の配慮を大学で主に学んだので，高校の授業でも役立った。
- ・多くの運動・スポーツ（水泳，器械運動等）を経験できたこと。水泳の知識。
- ・実技授業の内容（出来ない生徒に対してはあまり役に立たなかった）。

○理論の授業に関して

- ・教科書にない内容について勉強したことが授業で使えたこと。
- ・授業で指導案を実際に書いていたこと。指導案の書き方は役に立った。
- ・どのようにしたら生徒の気を引けるのかや，教室での授業で生徒に対する投げかけや，できる生徒とあまり得意でない生徒に対する課題の難易度を変えるなどが役に立った。
- ・難しい言葉はいらぬということ。声かけの仕方。

○模擬授業に関して

- ・大学で学んだものは机上の空論でした。しかし，現場と大学では勝手が違うのは当然だと思います。大学で行った模擬授業や指導案の作成は，実際の現場とは全く違ったものだと前問でも述べましたが，教育実習の準備段階としては，自分の中でとても価値のあるものだと思います。模擬授業をしなくては分からないこと，指導案の作成をしないと分からないことなど，現場とは違いますが，大学で勉強しておいて良かった点だと思う。

- ・模擬授業や地域コースの授業，スポーツクラブの指導を通して，みんなの前に立つという経験を積んできたことが役立ったと感じている。前まではどちらかというと人前に出たくないタイプで，緊張で頭が真っ白になっていたと思う。実習中にこうならなかったのも，大学で多くの経験を積んできたからだと思う。
- ・学校スポーツの理論と実際に模擬授業の実践ができたこと。
- ・指導案を書くことは練習しておいて良かった。学生が考え実行した模擬授業は授業のネタとして使うのには良かった。模擬授業の資料等が役に立った。
- ・保健の模擬授業はとても役に立った。

○その他

- ・本当に現場と大学のギャップを痛感した。あまりない。ないと思う。特になかった。
- ・大学で学ぶことと現場でやるのが違いすぎて，何も役に立ったとは思わない。
- ・この大学ではもっと教育実習に向けた勉強をしなければならなかった。足りないことが多いと思う。指導案を書くことや模擬授業を行うことを経験しなければ，力不足で実習に行くことになる。圧倒的に他大学に比べて不足していると感じた。
- ・大学でのスポーツクラブでやっていた，メニューをたて，たくさんの人の前で話をする，伝えることや，子どもへの声かけなどについてはスムーズにできた。

本学は教員養成を主目的とした大学ではないので，ここでの回答は，書かれてもおかしくない内容であろう。授業で学んだ内容を肯定的に捉えている反面，現場の授業の現実との間のギャップも強く感じているようである。ここで示された内容は，大学における今後の授業内容や方法を検討するのに重要な示唆を与えてくれていると考える。

2.7. 大学の授業で事前に学んでおきたいこと

「大学の授業において，教育実習以前に学んでおきたかったことは何ですか」という質問に対して，以下のような回答が得られた。実技，理論，模擬授業，その他に分類して回答を記載した。

○実技の授業に関して

- ・専門種目以外のたくさんのスポーツの指導法，種目についての指導上の留意点，ルール。
- ・運動嫌いややる気のない生徒を指導する際の指導法。指導法の面ではあまり大学では授業が無い気がします。
- ・授業構成の方法。笛の使い方。

○理論の授業に関して

- ・ここはスポーツ大学なので，積極的に実技に参加するが，中学生や高校生は皆がそうではないので，そのことを知っていればもっと良かった。
- ・指導案の書き方をもっとしっかり学んでおけば良かったと思う。大学の様式では全く通用せず，実習の大半の時間を指導案作りに費やしてしまったために，部活に参加出来ないなど，支障も多く出た。
- ・意欲のない生徒に対する対応を学んでおきたかった。
- ・授業の組み立て。板書術。実技で出来ない生徒への指導法。
- ・現場で必要なこと。単に指導案の書き方ではなく，何を考えて，どんな準備が必要なのかまでを明確に理解した上での指導案の書き方。
- ・保健や体育の勉強会，もっと教材研究をしておけば良かった
- ・できない生徒に対しての声かけなど，もっと壁にぶつかっておきたかった。指導案の書き方，言葉遣いを学んでおきたかった。
- ・保健の授業について。保健の授業の仕方を詳しく。
- ・体育・保健の指導法（技能習得の段階的な

指導の仕方など)。

- ・教科を教えるのではなく、教科で教える、ということを実習前に考えておきたかったです。その種目の授業を50分することだけに気を取られていて、何を学ばせたいのかと言うことを考えるのがとても難しかったです。あと、模擬授業でわざと見学者を作るのもあるかなと思いました。見学者をうまく使うのも授業の一つだと思います。

○模擬授業に関して

- ・学ぶというよりもやっておいたほうが良いと思ったことは教材研究です。自分の専門種目は、教材研究しなくてもその種目の特性や方法は分かりますが、専門種目以外のもので、運動能力の低い子どもにどのようにして安全に教えるかという点をしっかりと押さえておきたかったです。なぜなら、大学の模擬授業では、生徒役の大学生は高校でいえばトップクラスの運動能力を持っていたので、多少難しく危険な運動でもこなしてくれました。しかし、運動嫌いや運動能力の低い子どもに専門種目以外を教えることは意外と難しいので、事前に大学で教材研究としてやっておきたかったです。
- ・もっと実習の練習をすべきだった。実際に指導する機会。模擬授業。

○その他

- ・どのような話し方をすれば人に話を聞いてもらえるのか。教える内容に関しては、勉強すれば何とかできるが、話すのが苦手だったり、好きでない人にとって1番難しいと思う。

前節での回答と同様に、ここでの内容も今後の授業に関する検討において重要な資料になると考えている。特に、教職に関する科目である保健体育科教育法や模擬授業(学校スポーツの理論と実際、学校スポーツ専門実習Ⅰ・Ⅱ)においては、授業内容に加えなければならないことがたくさんありそうである。

2.8. 後輩へのアドバイス

「教育実習全体を通しての感想、および後輩の3年生に伝えておきたいこと」という質問に対して、以下のような回答が得られた。似たような内容は省略して記載した。

- ・睡眠時間は全然ないけれど、毎日がひどく充実していました。授業、部活動、教材研究のサイクルでとても辛かったけれど、教えれば教えるほど、吸収していく生徒を見ると毎日手を抜けない状態でした。3年生に言いたいことは、あまり指導案ばかりに気をとられすぎないようにして欲しいと思う。
- ・もっと教える種目の勉強をする必要があると感じた。生徒は、そんなことまでと言うところを聞いてきた。教えることの10倍ぐらい多くの知識が必要でした。
- ・楽しい反面苦しい実習だった。自分の力のなさや甘さを痛感した。自分自身を見つめ直す良い機会となったので良かった。やり過ぎることはないので、教官の先生、生徒、実習に関わる全ての人に対して、精一杯尽くすことが大切だと思う。
- ・教育実習では、今までにやったことがないぐらいたくさん勉強した。寝る時間もなく、大変でしたが、とてもいい経験ができました。3年生には、指導案の書き方を勉強しておいた方がよいと伝えたい。
- ・教育実習は楽しいことばかりではありません。厳しいことを言われたり、悩むことも多いと思います。先生という立場の責任の重さと難しさを知ることになると思います。でも、そんな苦労は、生徒たちの笑顔や感謝された一言、最後の色紙など、自分が頑張った分の反応を返してくれると嬉しくて、吹き飛びます。やりがいを感じる瞬間だと思います。生徒は思っている以上に先生のことをよく見ています。いい加減な態度だと生徒はついてきません。せっかくの実習なので、全力を出して取り組んでほしいです。

- ・大学で学ぶ教育実習と現場で経験する教育実習は、全く違い動揺しました。その違いを感じ取ることも教育実習の一環かもしれませんが、しかし、教育実習では泣き言は通じず、時間通りに授業やHRがやってきて、生徒に何を伝えたいのか自分なりに勉強しておかなければなりません。大学の授業は、現場とは異なりますが、準備段階としての勉強としては、とても良い訓練だと思うのでしっかりと勉強しておくことをお勧めします。また、私を感じた大切なことは、授業で手本として生徒に実演を見せることです。私たちは実際の先生に比べて若く、運動能力も高いので、実際に生徒とプレーしたり、手本を見せることができます。逆に言えば、教育実習生にできて先生にできない唯一の能力です。生徒にアンケートを取って分かったことですが、実演で失敗しても生徒に体育大学の先生でも失敗することがある、と感じさせることができ、生徒に失敗する勇気を与えることができます。先生たちの評価も、生徒が先生と楽しく運動していて良かった、と賞賛の声が多かったのです。実際に授業をする時、声だけで指示するだけではなく、生徒に手本を見せ、体やボールの使い方、失敗の仕方を見せることも重要ではないかと、教育実習に行っただけで感じました。
- ・何回も指導案を書き直し、授業もうまく進まなくてしんどかったけれど、その中でも楽しいことがいっぱいあった。生徒が「先生！」と呼んでくれて、いっぱい話したり、授業が「楽しかった」と言ってもらえた時はすごく嬉しかった。しんどいと思うときがあるけど、その中でも得るものはたくさんあると思うので、後輩の皆には頑張ってもらいたいと思います。
- ・夢のような3週間でした。大変なこともたくさんありましたが、本当に充実していました。子どもはとても素直で、私の行動しただいで伝わるものがたくさんあるんだと

感じました。生徒に言っていることは、自分にも言っているような気がしました。「教育は共育」ということをとても実感しました。3年生へ。実習では自分の良いところも、そうでないところも現れます。そして、それは子どもには全部伝わります。自分らしさを忘れずに、素直になることが大切ではないかと思います。その誠意は必ず子どもに伝わり、子どもも自分も成長できると思います。

- ・教育実習に行くにあたって、中途半端な気持ちでは絶対に行かないで欲しい。生徒たちや先生たちの貴重な時間を削ってまで実習させていただいているので、ただ免許が欲しいからなどの気持ちで行かれると、すごく実習校に迷惑がかかるということを十分理解した上で、実習に臨んで欲しい。
- ・理想と現実の違いを恐ろしく感じた3週間でした。ある程度できない生徒のことを頭に置いて指導案の作成や授業に取り組んでもらいたい。出来ない生徒よりも、出来るけれどやらない生徒を指導する事が一番難しい。
- ・大学で勉強することと現場でやることはかなりギャップが大きいこと。大勢の生徒に話を聞かせるためにはどのようなタイミングでどういう話し方をすればいいのか、教育実習に行く前に体験することが出来るなら、面倒でも経験しておくといいと思う。
- ・1時間の授業を実施しようとする、10時間の勉強時間が必要だと思うので、今からしっかり勉強して欲しい。実習前に十分準備してから実習に行くべきだ。
- ・実習はとても楽しく充実した時間でした。実習生という立場なので教員の全ての仕事に接することは出来ませんでした。体育科以外の先生方や、授業を担当していない生徒とも関わることができ、様々な立場の先生方の考え方や、学年によって違いの大きい生徒たちの考え方などを感じ取ることが出来た。これから、実習に行かれる方は、

実習なので何も出来なくて当たり前，色々な事に積極的に頑張ってください。

- ・3週間は充実した時間だった。疲労は確かにあったが，それ以上に学べたことが多い。寝ずにやらなければならないという気持ちが強かった。教育実習だけでも，生徒からすれば先生であり，教育者ということを忘れずに実習に行って欲しいと思う。
- ・生徒たちの目はキラキラ生き生きしている。実習中はすごく元気をもらい，助けられた部分が多い。教育実習はインターシップ実習で学んだ事とはまた違うことを学べた。本当にいい経験ができたことに感謝しています。若さ，元気さ，へこたれずに。
- ・ある先生がおっしゃっていたことで，私が印象に残っているのは，授業のネタは10持っておかなくてはいけませんが，授業では1教えるつもりで授業すること。教材研究はしっかり行うことが大切。教育実習は大変だが，とても良い経験をさせてもらいました。

ここで書かれている回答には，実際の教育実習を苦労して経験した者にしか書けない学びと省察が示されており，これから教育実習を経験しようとしている後輩にとって大変参考になる内容である。来年度の保健体育科教育法の授業や教育実習事前指導で，これから教育実習に臨もうという学生たちに是非とも紹介したい内容である。

2.9. 学びの実態から読み取れる課題

以上のような，学生の回答から，教育実習を経験することで，日常の大学での授業では経験することができない多くのことを感じ，考え，学ぶことができ，大きく変容したことを読み取ることができる。

教育現場で長年多数の教育実習生を指導してきた筆者の経験から見ても，本学学生は，実際の教育現場で生き生きと活動する多様な生徒たちを前にして，授業をしてみなければ

体験することができない多くのことを学び取ったと感じている。

しかし，これらの回答から，大学の教員養成に関わる授業や指導上の問題点と今後の課題も読み取ることができる。以下に，大学での授業に関して，改善が必要となりそうな回答が得られた3項目における課題を示す。

①実習で何を学ぼうと思っていたか

回答の内容として，具体的な授業に関する事より，教師という仕事や生徒との関わりに関する事柄を学ぼうと考えていた学生が多かった。本論に記載していないが，安易な姿勢や考え方で実習に臨む学生もいたことから，保健体育科教育法の授業や実習事前指導の場で，教育実習の意義と課題や臨む姿勢についてきちんと伝えるよう，指導内容を再検討しなければならないと考える。

②大学で学んだことの中で，今回の実習で役立ったことは

回答の中で否定的な内容として，「あまりない，特になかった，現場と大学のギャップを感じた」と書かれていた。この回答は，前任校でも教育実習に来た学生たちから問題点として毎年示された。教員養成大学においてさえ，毎年1000人を超える教育実習生を受け入れて指導している各附属学校からの強い意見がなければ放置されていた課題である。大学と附属の共同研究の結果として，必修科目を含むカリキュラム改善がやっと思われた経緯がある(松田恵示，2007)。本学は教員養成系大学ではないが，7割を越える学生が教員免許を取得することを考慮したカリキュラムの検討や授業内容の再考が必要であると感じている。

③大学の授業において，教育実習以前に学んでおきたかったこと

教育実習の現場で苦労した学生の要望として，「指導案の書き方，授業構成の方法，運動嫌いややる気の無い生徒の指導法，できない生徒への指導法」が示されている。

今年度の保健体育科教育法の授業では、かなり徹底して授業構成法や指導案の書き方を指導演習したが、学生にとってはまだ不足しているのだろう。来年度の実習の事前指導でも、再度確認・指導しなければならない検討課題である。

実技の指導法に関しては、各種目での実技Ⅱの授業における指導内容や方法の検討が必要であると思われるが、②での検討と同時に、大学全体の問題として今後検討していかなければならない課題でもあろう。

3. 教育実習の自己評価における変容について

この章では、教育実習における指導と評価の一体化を目指した対応として、東京学芸大学で平成19年度から使用されているような、実習校で行われる実習評価の評価項目や評価観点と同様の視点で実習生本人が行う自己評価の実施につなげるために、試行的に実施した教育実習自己評価の結果について検討を行う。

3.1. 調査方法

教育実習事前指導に出席した学生全員に依頼した自己評価用紙（資料1）を、実習終了後に提出させ、評価結果と課題と成果の内容を項目ごとに集計した。

自己評価用紙は、本学の実習評価用紙の評価観点・評価規準とは若干異なるが、教育実習においてどのような観点と規準で評価されるのかが明確に示されたものを使用した。

自己評価票は、①教材研究、②指導計画の立案、③学習指導と評価、④生活指導と生徒理解、⑤勤務態度と実習への意欲、の5つの評価項目と、各項目ごとに4～5の評価観点で構成されている。

自己評価は、実習の中間時期と終了時の2回、優から劣までの5段階で行い、同時にそれまでの成果と課題を自由に記述することを求めた。回収数は9月末現在84名で、回答率

は51.9%であった。なお、評価の中間時期については、実習校によって実際に授業担当する時期や状況が異なるため、学生の判断に任せた。

3.2. 結果と考察

(1) 自己評価の変容について

中間時と最終時の自己評価の各項目ごとの値（5から1点）を集計し、それぞれ平均値と標準偏差を求め、SPSSを使用して平均値の伸びに関してt検定を行った（表1）。

表1の集計結果と有意差検定の結果から、評価項目Vの1.出勤の状況と2.指導案・日誌等提出物の提出状況を除く、他の全ての項目・観点において、中間評価時よりも最終評価時の評価の方で高い評価をしており、また、標準偏差からも最終時の方が評価の散らばりが減少したことが分かる。このことから、実習における授業経験と指導教諭の適切な指導によって、本人が明確に自覚できる程度にまで各観点に示されている実践力が高まったと自己評価しているといえる。しかし、項目や観点によっては、満足いく程度にまで実践力が高まったと評価されていないものがあり、それらが実習以前に指導しておくべき項目であるともいえる。

以下に、評価項目ごとに課題となる観点についての考察結果を示す。

①中間評価での特徴から

- ・Ⅰ教材研究では、2.学習指導要領および学校指導計画等の検討2.69、4.単元設定理由の明確化2.95の2観点で2点台と低く評価している。
 - ・Ⅱ指導計画の立案では、3.発問・助言等と反応予想の明確化2.83を低く評価している。
 - ・Ⅲ学習指導と評価では、4.資料・教具・機器等の活用、効果的な板書2.87、5.授業中および授業後の適切な評価活動2.71の2観点を2点台と低く評価している。
- 学校教育の現場で授業を行うのに際して、

表1 教育実習 自己評価結果 5段階評価での中間評価と最終評価

評価項目	主な観点	中間平均	SD	最終平均	SD	有意確率
I 教材研究	1. 教科書等の分析・活用	3.08	0.90	3.96	0.84	0.000
	2. 学習指導要領および学校指導計画等の検討	2.69	0.95	3.39	0.94	0.000
	3. 興味・関心に応じた教材の開発・工夫	3.24	1.02	4.08	0.86	0.000
	4. 単元設定理由の明確化	2.95	0.90	3.87	0.86	0.000
	5. 教科内容に関する専門性	3.07	0.95	3.85	0.85	0.000
II 指導計画の立案	1. 本時の目標と評価の明確化	3.23	0.98	4.01	0.84	0.000
	2. 目標に応じた学習指導過程の構想	3.11	0.82	3.83	0.78	0.000
	3. 発問・助言等と反応予想の明確化	2.83	0.94	3.83	0.90	0.000
	4. 資料・教具・機器等の準備, 板書計画の立案	3.11	0.93	3.98	0.83	0.000
III 学習指導と評価	1. 音声・言語・文字等の明瞭さ, 正確さ	3.25	1.08	4.17	0.84	0.000
	2. 受容的, 応答的な姿勢	3.21	0.86	3.88	0.84	0.000
	3. 生徒の反応への適切な応答	3.04	0.94	3.83	0.83	0.000
	4. 資料・教具・機器等の活用, 効果的な板書	2.87	0.91	3.77	0.81	0.000
	5. 授業中および授業後の適切な評価活動	2.71	0.96	3.50	0.87	0.000
IV 生活指導と生徒理解	1. 生活場面での生徒との関わり	3.71	0.89	4.62	0.62	0.000
	2. 学級指導および教室環境への配慮	3.58	0.94	4.32	0.69	0.000
	3. 観察に基づく個と集団の課題把握	3.10	0.93	3.89	0.85	0.000
	4. 道徳・特別活動への参加	3.49	1.21	4.06	1.03	0.000
V 勤務態度と実習への意欲	1. 出勤の状況(無断欠勤, 遅刻等)	4.95	0.34	4.94	0.36	0.829
	2. 指導案・日誌等提出物の提出状況	4.30	0.99	4.46	0.88	0.340
	3. 協同的な姿勢・コミュニケーション力	4.01	0.91	4.52	0.78	0.000
	4. 人権等への配慮と規範意識	3.98	0.91	4.32	0.73	0.000

最低限身につけていなければならないこととして、授業構成の力がある。前章での調査の回答でも、現場の授業で何に気付いたのかと実習を通して何を身に付けたのか、実習後の勉強の課題に関する質問の回答に書かれていたように、教材研究不足や授業構成における基本的な考え方の理解不足が課題としてあげられていた。回答者数が3倍程度に増えたこの自己評価の調査においても、同様に認識していることから、実習に臨む前に、もっと徹底したこれらの内容に関する指導を行わなければならないことがわかる。教育実習でお世話になる学校で行われた事前のオリエンテーションや打ち合わせから本実習までの期間で、最低限の教材研究は済ませておき、単元計画と単元前半の指導案の素案を準備しておくように、保健体育科教育法の授業や事前指導、模擬授業に関わる授業において指導を徹底しなければならないと考える。

②最終評価での特徴から

・ Iの3.興味・関心に応じた教材の開発・工

夫4.08, IIの1.本時の目標と評価の明確化4.01, IIIの1.音声・言語・文字等の明瞭さ, 正確さ4.17, IVの1.生活場面での生徒との関わり4.62, 2.学級指導および教室環境への配慮4.32, 4.道徳・特別活動への参加4.06, Vの全観点では評価が4点以上と高く評価している。

実習校での指導教諭の適切な指導により、中間評価時に評価が低かったIIの1.「本時の目標と評価の明確化」の評価が大きな伸びを示している。Iの3「興味・関心に応じた教材の開発・工夫」を含む中間評価時に評価が低かった評価観点でも評価が高くなっているところから、実際の授業を経験し、問題点を指摘され、丁寧な指導を受けながら授業構成に関する実践力が高まっていくことがよく理解できる。

しかし、ここで高く評価されるようになった「IV.生活指導と生徒理解」に関わる評価観点は、教育現場で実際の生徒を前にしたり、生徒の中に入って交流してみなければ経験し

たり確認したりすることができないものであり、大学で事前に練習することができないものである。予備的な知識として授業において学生に伝えることはできるが、本実習においてしか経験できないことだろうと考える。

③自己評価に関する考察のまとめ

評価項目のⅠ．教材研究、Ⅱ．指導計画の立案、Ⅲ．学習指導と評価に関しては、教育実習に行く前に大学での授業においても指導・学習できる内容であり、保健体育科教育法Ⅰ・Ⅱ・Ⅲや模擬授業に関わる授業の内容や方法を検討・改善することで対応できる項目である。しかし、項目Ⅳに関しては、教育実習の現場で実際に生徒を前にして経験しなければ学習することができない内容であり、保健体育科教育法の授業や事前指導の時だけでなく、教職に関する授業においても積極的に努力するよう確実に伝えていかなければならない項目であろう。

教育実習での3週間については、1週目を授業の枠組みづくりと授業運営（マネジメント）ができるようになる期間、2週目を授業の中味づくり（適切な教材提示）ができる

ようになる期間、3週目を全体指導と個別指導・評価ができるようになる期間であると捉えて、現場で長年教育実習生を指導してきた（松田恵示，2007）。この考え方から見ても、ここでの自己評価の結果は予想通りのものであり、前章での回答の検討で明らかになったことも同様である。

教育実習において、始めから自分のねらい通りに授業が上手にできるわけではなく、数々の失敗を積み重ねながら、そこでの学びを生かして少しずつ進歩していくということを理解させることが重要であり、そのための基礎として授業構成に関する勉強を努力して積み重ねていく必要があることを伝えていかなければならない。

(2) 成果と課題の変容について

表2に示した課題と成果の一覧は、個人別に中間時と最終が対応したものである。

中間評価時では、多くの学生が生徒とのコミュニケーションの必要性を感じており、最終評価時の成果でもコミュニケーションが上手でできることで授業への効果があったこと

表2 中間と最終評価時の成果と課題

中間での課題	最終での成果と課題
早口で優しすぎる話し方	意識すればゆっくり堂々と自信を持って話せた
指導案不備、準備不足、研究不足	余裕なし、教材研究不足、協力不足
生徒との会話、環境作り、時間半分	学ばせる授業が課題、知識不足
教材の有効利用、生徒とのコミュニケーション不足	荒い保健授業計画の改善、板書と発言の改善が課題
積極的なコミュニケーション必要、工夫不足	この授業で何がしたいのかを表現できた
言葉遣いの改善必要、教材研究と工夫	言葉遣いや気配りできた、板書が課題
教材研究不足、生徒とのコミュニケーション必要	特別活動への積極的参加○、生徒とのコミュニケーション○
大きな声としっかりした姿勢、提出期限、生徒との関わり必要	コミュニケーションできた、満足いく授業やれなかった
単純な指導計画と授業	指導方法の工夫が今後の課題
生徒との関わりを積極的に、授業進行の工夫	生徒との関わり合いと信頼関係の繋がりを理解、授業中の配慮が課題
効果的な声かけとフィードバックできず、評価の準備	声かけできた、板書と声の大きさは改善できた
生徒とのコミュニケーション必要、授業運営の仕方理解	生徒の問いへの応答できた、生徒第一の考えを理解
生徒との会話不足、指導案の不備	教材準備、体調管理の不備
授業の基本的条件不備、コミュニケーション不足、消極的	適切な対応○、部活動・行事への参加○、指導案未熟、流れの把握○
指導案未熟	生徒との関わりとやりがいの関係理解、指導案づくりと授業充実が課題
指導案作りで手一杯	指導案通りの授業しかできなかった
積極的なコミュニケーション必要、個への対応、基本的事項の不足	教材研究の割に成果不十分、事前準備不足、生徒との対話が重要
授業観察の成果が授業に生きた	生徒とのコミュニケーション○、スムーズな授業が課題
生徒とのコミュニケーション不足、観察実習中心だった	堂々と授業できたが評価の余裕なし、楽しむの目標は達成
生徒とのコミュニケーション不足と授業の進め方の難しさ	コミュニケーションの大切さを理解、生徒からの観察を感じられた

中間での課題	最終での成果と課題
授業内容の把握が不十分	教えることの楽しさと大変さを学んだ
安全面の配慮できていない	保健の教材研究不足
生徒の態度への配慮不足	教材教具の工夫や生徒への配慮の重要性を理解
生徒とのコミュニケーション不足、立ち位置の問題、生徒指導できず	男子生徒とのコミュニケーション○、教材研究×
生徒とのコミュニケーション不足、授業時間配分だめ、注意する勇氣ももっと伝わりやすい授業に、慣れに従って余裕が	時間配分×、生徒の位置把握×、やる気を引き出すことが課題 体育を通して生徒の成長が見られた
生徒とのコミュニケーション不足、積極性の無さ	指導案の提出遅れ、コミュニケーション不足の解消
生徒に接する態度、声かけの方法、コミュニケーション方法わからず	声かけ、内容の工夫、言葉遣い良くなった
伝え方に問題、専門知識不足、工夫の無さ、生徒の顔見られない	余談、生徒とのコミュニケーション○、楽しい授業○、興味のない生徒への対応が課題
指導案はOK、授業のシミュレーションできていない	授業時間の流れ理解、生徒に伝えるべき事がわからない
興味の持たせ方×、保健の授業展開×、体育の安全面配慮×	授業中の生徒とのやりとり増加、コミュニケーションの増加
指導案書きで精一杯のため授業計画不足	指導案見学増加、授業計画と準備できた
大きな声を心掛けた、保健授業での発問の難しさ	無欠勤、生徒とのコミュニケーション○
授業時間配分の難しさ、教材研究不足、単調な話し方、集団指導	伝えるべき事の明確化、落ち着いた授業、生徒観察技能の低さ
教材研究あまりやらず	教師としての態度学んだ、教材研究やった
緊張して人前でうまくしゃべれない	伝えること・指導することの難しさを学んだ
教材研究不足	無遅刻無欠席、教材作りと反応を見ながらの会話の重要性を理解
前時の反省が活かされた	スムーズな授業の流れつかめた、余裕できた
生徒の特徴とクラスの雰囲気づかみ、組に対応した授業が必要	各組に対応した授業の工夫を理解、生徒の発言への対応が不備
板書計画の明確化が課題、積極的な生徒との関わり必要	板書計画OK、生徒との関わり増、教材の工夫不足
授業準備・観察・学びの不足、生徒への配慮不足	学びの大切さと知ることの重要性を理解
指示出せない、生徒を動かさない	抑揚をつけた指示○、生徒との積極的コミュニケーション○
生徒とのコミュニケーションOK、教材研究不足	OBになってしまった部分がある
生徒の反応に対する応答できず、声が小さい	生徒の反応見る余裕○、大きな声出せた
先生と同じ内容ですることですら難しかった	保健・道徳の授業で教材の工夫できた
生徒の応答に対する返答×、一部生徒のみとの関わり	多くの生徒とのコミュニケーションとれた
一日の流れつかめた、指導案うまく書けない	授業の流れとポイント理解、生徒との関わり、指導案○、深い勉強の必要性
教材研究不足、指導案できない、生徒とのコミュニケーション不足	実習意欲の高まり○、発問を含まない指導案、生徒との関わり大切にする
一連の授業の流れ理解できた、適切な指示や評価は言葉足らず	評価を意識した授業・明確な目的を持った授業づくりが課題
板書不十分、明瞭で通る声必要、積極的な生徒との関わり必要	工夫した板書○、多くの生徒との関わり、教材研究を活かした授業が課題
常に学ぶ姿勢が大切、指導内容と授業の目標が曖昧	音声・言語・学習方法を工夫改善できた
教材の工夫とめあての明確化が課題	生徒との関わりもてた
観察実習のみ	先生や生徒とのコミュニケーション、教科書中心の保健授業、知識不足
オリエンテーションを欠席	生徒とのコミュニケーションとれた
字が汚い、教材研究はできた	スムーズな授業○、大きな声○、保健の教材研究不足
声が小さい、全体視と周辺視、積極的な生徒とのコミュニケーション×	生徒との言葉のキャッチボールできた、生徒とのコミュニケーションとれた
的確な伝え方×、専門的な指導内容難しい	落ち着き○、生徒とのコミュニケーション○
生徒との関係難しい、声のトーン一定	生徒との会話○、授業中の対話○
知識の無さを知った	教材研究や教具の工夫に一生涯懸命取り組んだ
準備不足、実習を甘く見ていた	教材研究不足、やっとスタート地点に立てた
全体を見た指示ができていない	全体を見た指示できた
板書のバランス悪い、言葉遣い×、指導方法の改善が必要	生徒とのコミュニケーション取った
指導案の書き方なっていない	指導案に沿った授業展開できた
教材研究不足、生徒とのコミュニケーション良好	中間での課題解決、授業でのメリハリ不足
集団指導に苦労、指導案の書き方分からず、コミュニケーション良好	集団管理習得、指導案の書き方理解、生徒とのコミュニケーション○
教材研究不足、生徒とのコミュニケーション不足	教材研究まだ不足、コミュニケーション増加
積極的な生徒との関わり必要、発問と予想反応の明確化課題、指導細案不備	多くの生徒との関わり○、臨機応変な対応○、知識不足を認識
コミュニケーション不足の解消、保健の知識不足	声の大きさ○、コミュニケーション○、内容の浅い保健授業
授業をやるだけで精一杯、生徒の見えない授業展開が問題	生徒との関わり良好、生徒の実態を把握する力の不足
指導教諭の指示で動いていた、明確さなし	自己判断で動けた、準備万端の成果、意図を持った行動が課題
大きな声とアクセントをつけた説明が課題	全体的に良くできるようになった
勉強不足、準備不足	勉強不足、準備不足、人間としての成長が必要

中間での課題	最終での成果と課題
抑揚をつけた会話に、目標と内容のつながりなし、全体を見る視野×	安全面の配慮不足、見学者の扱い課題、明確な指示の効果、はじめ必要
H Rの生徒との関係良好、生徒への声かけ課題、動かし方も課題	生徒とのコミュニケーション○、動かし方○、適切な学習内容×、場の設定
曖昧な表現の改善、生徒の答えに明確に反応、興味を持たせる展開	生徒との関わり○、興味関心を持たせる導入○、最初と最後の挨拶×
準備不足、話の展開×、生徒とのコミュニケーション○	準備不足、スムーズな体育授業展開○、保健授業の展開×
すべてに緊張	生徒と仲良くできた、楽しい授業○、余裕でてきた
教材研究を怠らず良い授業作りを	教材研究の大切さ理解、幅広い知識の必要性理解
余裕を持った指導案作成、積極的な生徒とのコミュニケーション必要	声の大きさとメリハリ、大きな声、的確な指示、授業中のやりとり 全て○
ボランティア経験が活きた、生徒指導の程度わからず	生徒や先生とのコミュニケーション効果、自信が生まれた
教材研究不足、保健授業でのスムーズな展開○	保健での緊張と弛緩の波つくれた、体育での個別指導の効果見えた

を示している。また、教材研究不足とインタラクションの難しさが中間時の課題として示されており、実習における多くの失敗や努力を積み重ねた結果として、最終評価時にはそれらの努力の成果が示されているが、これからの課題も多く残されていることがわかる。

4. おわりに

教員を目指している学生にとって、教育実習とは、教科指導、生活指導など、教員としての基本的な職務を実践できる能力があるかを試される期間であり、そこでの成果をもとに、教員としての適性が判断される期間でもある。

学生の母校であっても、教育実習の現場へ学生たちをそこへ送り出す以上は、実習校や指導教員から見れば、びわこ成蹊スポーツ大学で指導を受けた学生である。そのため、実習において不足しているまたは問題があると指摘を受けた事柄に対しては、大学として責任持ってその対応を検討しなければならない。カリキュラムや指導内容・方法を含めて大学全体で検討するためには、実習における学生たちの学びの実態や自己評価における学生の自己省察の変容を知ることが大切だと考えている。

本研究報告で明らかになった課題と、実習校から送られてくる実習評価用紙の総合所見で指摘されている問題点を改善するために、教職に関する教科や実技教科、模擬授業関連教科を含むカリキュラム改善などの多くの内容を今後継続して検討していかなければなら

ないと考えている。また、本研究報告で行った調査に関しても、実習に参加する全学生の回答を得られるように工夫して、毎年継続して行っていかなければならないと考えている。

[引用・参考文献]

- 小林宏己・坂井 祐・高原 学・橋本美保・柴田俊和・鎌田和宏・白間正博・中村昌子・谷本直美・矢嶋昭雄・京極邦明・鈴木健一・石川直美・坂井英夫・山根正博 (2004). 教育実習の実施形態と評価に関する研究. 平成15年度東京学芸大学教育改善推進費による特別開発研究プロジェクト研究報告書
- 松田恵示・柴田俊和・瀧澤政彦・高橋直樹・板村邦弘・山本浩二・上野佳代・彦坂秀樹・佐藤善人・塚本博則・鈴木 聡・原田純二・原祐一 (2007). 教師の成長モデルと現代的課題から見た実践的力量を形成する体育科の教員養成プロジェクト報告書. 平成18年度東京学芸大学教育実践研究推進機構特別開発研究プロジェクト報告書
- 柴田俊和 (2007) 教員養成の基幹大学にふさわしい教育実習をもとめて－附属学校の立場から－. 平成19年度東京学芸大学教育実習フォーラム「附属学校における教育実習の現状と将来」のパネルディスカッション資料
- 柴田俊和 (2008) 教育実習を通して身につける体育教師の授業力. スポーツ学のすすめ. 大修館書店: 東京. pp.58-60
- 東京学芸大学教育実践研究支援センター教育実習指導部門 (2007). 教育実習の手引き.
- 東京学芸大学 (2007). 附属小学校・中学校・高等学校用教育実習日誌.

資料1 教育実習 自己評価票

教育実習 自己評価票

実習生	コース	学籍番号：	氏名：
実習校			担当： 学年 組
実習期間	平成20年 月 日～	月 日	出席： 日/欠席： 日/遅刻： 回

- 記入方法**
- ・教育実習期間の中間と最終に2回評価する。(評価日を記入)
 - ・各観点を5段階で評価する。(優：5 ← 普通：3 → 劣：1)
 - ・その時点で評価できない観点は、評価欄(5-4-3-2-1)を斜線で消す。
 - ・空欄には、自分に適した観点を追加記入してもよい。

評価項目	主な観点	中間(月日)	最終(月日)
I 教材研究	1.教科書等の分析・活用	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	2.学習指導要領および学校指導計画等の検討	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	3.興味・関心に応じた教材の開発・工夫	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	4.単元設定理由の明確化	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	5.教科内容に関する専門性	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	6.	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
II 指導計画の立案	1.本時の目標と評価の明確化	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	2.目標に応じた学習指導過程の構想	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	3.発問・助言等と反応予想の明確化	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	4.資料・教具・機器等の準備、板書計画等の立案	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	5.	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
III 学習指導と評価	1.音声・言語・文字等の明瞭さ、正確さ	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	2.受容的、応答的な姿勢	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	3.生徒の反応への適切な応答	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	4.資料・教具・機器等の活用、効果的な板書	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	5.授業中および授業後の適切な評価活動	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	6.	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
IV 生活指導と生徒理解	1.生活場面での生徒との関わり	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	2.学級指導および教室環境への配慮	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	3.観察に基づく個と集団の課題把握	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	4.道徳・特別活動への参加	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	5.	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
V 勤務態度と実習への意欲	1.出勤の状況(無断欠勤、遅刻等)	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	2.指導案・日誌等提出物の提出状況	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	3.協同的な姿勢・コミュニケーション力	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	4.人権等への配慮と規範意識	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1
	5.	5-4-3-2-1	5-4-3-2-1

成果と課題	(中間)	(最終)
	*簡条的に簡潔に記入	

